国際基督教団主管者の吉本美枝氏が12月30日、天に召された。享年101歳であった。朝祷会、日本キリスト教婦人矯風会、日本キリスト伝道会、日本福音学校、イエスの友会など数多くのキリスト教団体で奉仕し、そして指導した。葬儀で司式を務めた東海林昭雄氏（日本基督教団埼大通り教会牧師）に、吉本氏の足跡を書いてもらった。

## 〝天に逝かれた巨星〟吉本美枝牧師をしのぶ

# 「十字架の主を仰ぎつつ」

東海林昭雄（日基教団埼大通り教会牧師）

東海林氏

国際基督教団主管者の吉本美枝牧師が12月30日、地上の業を終えて天に凱旋された。享年101歳。召されるその日まで現役であった。これほどの高齢者で最後まで伝道、牧会に励まれた人物は実に稀有な存在であると言える。

吉本牧師は1912年に、島根県松江市出身の旧メソジスト教会の牧師であった父、和田喜一郎師と母、斐さんの6人兄弟の次女として、父の赴任伝道地であった伊豆大島で生を受けられた。

吉本牧師が5歳のころに経験した鮮やかな記憶として残っている光景があったと言う。

父親の喜一郎師が旧メソジスト教会の年会に出席のために不在であった時、突然、ドヤドヤと家の中に土足で上がりこんできた男たちがいた。特高の刑事たちであった。家探しをしながら「主人はいるか」と問う。

すると乳飲み子であった妹を寝かせていた母、斐さんが立ち上がるや、「土足のまま人の家に入って来られるとは何事でしょう。どうぞ、玄関にお戻りになって用件をおっしゃってください。只今、主人は名古屋で開かれている集会に出向いています」と、気丈にも威風堂々と喝破したと言う。

◆

当時の父の任地であった北陸滑川は仏教が盛んで、お寺が幅を利かせ、何事か起こると「耶蘇教はスパイである」と決めつけられるような時代であった。

両親の伝道者としての並大抵ではない苦労を見続けてきた吉本牧師は、何とか尊敬する父の助け手となり、親孝行したいと願い共立女子神学校（現東京神学大学）へ入学するが、そこで大きな壁に遭遇するのであった。

◆

入学して分かったことは、なんと神学校とは親孝行の道場ではなく、真に主より伝道者として召命を与えられた者たちが受ける訓練の場であることに初めて気付き、未熟な自分に気付かされると共に、大きな不安に苛まれたと言う。

明確な上よりの召命が与えられることを願う彼女は、朝食を抜き、賛生活の時間を祈りと聖書を読むことにと専心していた。その際、彼女の心をとらえた言葉があった。

『サンダーシングの思想と生涯』の著書を通し「十字架の主にまみえた彼女は、三省堂出版編集部の入社試験を受け採用され、金田一京助氏の指導の下、辞書編集の仕事に携わることになった。

そこで教会に迷惑をかけてはならないと考え、三省堂出版編集部の入社試験を受け採用され、金田一京助氏の指導の下、辞書編集の仕事に携わることになった。

膨大な資料から分析区分けする作業と、その厳密さは並大抵ではなかったと言う。特に

◆

その後、福井市カナダミッション伝道部、城之橋教会、下谷メソジスト教会に伝道師として奉職された。

東京・上野駅の近くにあった下谷メソジスト教会での働きは太平洋戦争が勃発する直前まで続けた。時勢が戦争の道へと色濃く染まりつつある中、カナダミッション所属の宣教師たちが母国に引き上げてしまうと、教会は容易ではなかった。万一紛失してしまうと全て水泡に帰してしまう。

そのような中、空襲のない日の、聖書の言葉を見つけて拾う仕事は至福の時であったというその一途な熱心さに、まず打たれたと言う。『その上私自身、何よりも伝道したかったのです。そして文字通り、結婚の翌日から日曜学校のポスターを町中に貼り回ってきました』、20年余り、努力の上に祝福を受けて、今は立派な会堂が与えられた。だが伝道に休息はないと美枝さんは言う。『これまでに倍して神さまのご用のために働かなくてはいけません。彼は吉本斗川という名前で、英語学校を開きたいという夢を持つ人物で、伝道する道も開かれると思います』と書かれた速達が送られてきたそうである。

◆

吉本牧師の葬儀の際、高橋玲二牧師が式辞で開口一番語られたことは、「国際英語学校は経営を第一としないとのことであった。時代は英語ブームもあり、大儲けしようと思えば、そのようになった時代である。しかし少数経営に徹したところに、理念を見る」と。

筆者が初めて吉本牧師にお会いしたのが25歳のとき。若輩者であったが、実に深々と頭を下げられて自己紹介して下さった姿の中に謙遜を見た。斗川牧師は早58歳で召され、その後吉本牧師は女手一つで子どもたちを立派に育て上げ、伝道牧会に励んだ。

代々木朝祷会、日本キリスト教婦人矯風会、日本キリスト伝道会、日本福音学校、イエスの友会などの奉仕と指導とをされた。その働きは超人的とも評せられる。十字架と復活の福音を語り続けられた生涯であった。今、1人の巨星が天に逝かれた。

（しょうじ・あきお）

吉本美枝氏